

「怨みが生まれえない世の中に」

島根県 訂心寺住職 木村芳典

世界では今この時にも、国と国、民族と民族が争いをしています。争いには複雑な理由や原因があるのでしようが、一旦争いが始まってしまえば必ず双方ともに大きな被害を受け、多くの命が失われます。住み慣れた町を破壊され、大切な人の命を奪われた悲しみや怒りは怨みとなり、双方の心に刻まれる事でしょう。怨みは人の心を失わせます。互いに「あの時の怨みは忘れない。いつか見ている」とその思いを持ち続け、怨みを怨みで返し合う限り、争いが終わる事はないと思います。

お釈迦様は、「怨みに報いるに怨みを以て返せば、ついに怨みが鎮まる事はない。怨みを捨ててこそ怨みは鎮まる」とお説きになりました。全ての争いは、互いが怨みを捨て、それが鎮まった時にこそ、初めて本当の終わりを迎えるということなのです。しかし現実はどうでしょうか。残念ながら今までもそして今も、世界から争いが無くなったためしはありません。そこには、一度心に刻まれた怨みを簡単には捨てられない私達の姿があります。

しかし、そのままの良いわけではありません。今までの怨みは捨てられないとしても、せめてこれからは、出来る限り新たな怨みを生じさせないように、私達が互いに努めてゆく事が大事なのではないでしょうか。そのような時にこそ、仏教が説く「慈悲の心」が大きな役目を果たしてくれると思うのです。

「慈悲の心」とは、「相手の身になりその人を慈しみ憐れみ、安らぎを与えて苦しみを取り除いてあげよう」と願う情け深い心を言います。互いに「慈悲の心」で向かい合えたなら、争いも起きないはずですよ。この様な時代だからこそ、お釈迦様の教えに耳を傾け「慈悲の心」を持つことが大切なのではないでしょうか。